

赤い  
櫛くし

か  
ぶ  
ら  
や  
こ  
う  
し  
鋪  
谷  
嚙  
矢

「どうする……」

大きな銀杏いちじょうの木の枝に座りながら清二はつぶやいた。背中にあたる幹は太く暖かく、乱れる清二の気持ちを少し落ち着かせる。

巨大な銀杏の木に隣り合うように、清二の住む裏長屋は建っていた。江戸府内えどふないではめずらしいほど大きなその木の名を取って、清二たちの裏店は銀杏長屋ぎんなんと呼ばれている。

秋が深まるにつれ、銀杏の木は、枝にたくさんの実をつける。通りがかりの者の中には、その匂いを嫌がる者も多かったが、貧しい清二たちにとって銀杏は大切な食べ物のひとつだ。

一粒たりともおそろかにはできない。また独り占めすることも許されない。

秋の月終わりにには、皆が拾い集めた銀杏を持ち寄って、長屋の横で火をおこし、「銀杏焼き」を行うのが毎年の恒例だった。

そこに住む連中が、銀杏のように匂うから銀杏長屋と呼ぶんだ、と陰口をたたく者もあつたが、これは、あながち嘘ともいえず、清二たちにも文句がいえなかつた。

職を失い病気になり、流れ流れて行き着く先が、中町なかつちようにある銀杏長屋なのだ。

清二たち一家も、もともととはそれほど貧乏ではなかつた。

飾り職人の父親源二が元気な頃は、表店おもてだなの通いの職人として、母親のおとせと姉のおみちの四人で、そこそこの暮らしをしていたのだ。

だが、ある冬、源二がひき込んだ風邪をこじらせて長患いになったころから、風向きは変わってしまった、二年前には、おみちが流行病はやりやまいであつというまに死んでしまった。

ろくに医者に診せることもできずに、大好きだった姉が死んでしまつてから、清二は人前で笑わなくなつたのだつた。

貧しい銀杏長屋だけに、人の出入りは激しい。

長屋の住人は、いよいよよ苦しくなると、あつさりと夜逃げをするからだ。荷物などないに等しいから、身一つで簡単に風を食らつていなくなる。

そして、三日と開けずに次の貧乏人が移り住んでくるのだ。

その日、清二は長屋に住む子供を集めて、戦遊びいくきをやつていた。十二という年のわりに体が大きく力もある清二は、長屋の子供たちの主あかしなのだ。

「あ、あれを見て」

一番幼いヨシが、舌足らずの声でそういつて指をさした。

子供たちの、首がいつせいにヨシの指し示す方角を見る。

長屋の入り口、半分以上腐りかけて、斜めにひしゃげた門のところに、新しい住人らしき人影が立っていた。

背の高い男と、その半分も大きさのない女の子の二人連れだ。

「けっこう可愛いな」

清二の、一の子分の徳が呟いた。

「ほんとだ。ほら、髪にきれいな櫛をさして、それが似合ってる」

そうだそうだとうなづく子供たちを睨みつけ、

「気にいらねえな」

ドスを効かした声で清二がいった。

熱いものに触れたように皆が振り向く。

普段、穏やかで、めつたに怒らない清二が、こんな声を出すのは、よほどのことがあつた時だ。

皆が、前にこの声は聴いたのは、隣の敏三が子分をつれて、銀杏長屋に殴り込んで来た時だった。子供の世界にも縄張りなづかと意地の張り合いはある。

結局、敏三は、顔を倍に腫らして隣町へ逃げ帰つていった。

「銀杏長屋には、あんなチャラチャラした奴は似合わねえ」

「そうだよな」

すぐに徳が調子を合わせる。

「そうだそうだ」

皆がそれに続いた。

自分を見て声を上げる清二たちに気づいたのか、遠くから女の子が丁寧にお辞儀をした。それが、おみのだった。

清二のひと言で、長屋におけるおみのの扱いは決まった。子供たちは、いじめはしないものの、おみのを無視し、仲間にいれようとはしなかったのだ。

それから、ひと月がたった夕方、清二は銀杏の木に登って、夕陽の沈んだあとの雲のきらめきを眺めていた。

家にいるのは嫌だった。病気のために体の自由がきかない源二は、夕方になると、決まって母親にありちらすのだ。

だから、夕暮れから星が満天を賑わすまで、銀杏の木の上は清二の隠れ場所だった。

大きな体に似合わず、清二は物事を深く考えるのが好きだった。

今、清二は、おみについて考えている。

昼間、おとせに言いつけられた用事を片付け、子供たちのたまり場に行こうとして、清二は足を止めた。

建物の向こうから、『おみの』という声が聞こえたからだ。我知らず、清二は聞き耳を立てていた。

「おみのお父つっあんって、もとは役者だったんだってさ」

「だから、あんなに良い男なんだな、色は白いし、背も高いし」

「でも、なんかでしくじってから、今は、芝居にも出してもらえなくて、嫁さんには逃げられ、バクチばかりやってるって、父ちゃんがいつてた」

「しっ」

「腹減ったなあ。今年も銀杏たくさんできるかなあ」

ひとしきり建物の影で話を聴いてから清二が姿を現すと、子供たちは、おみのの噂話をやめて別な話を始めた。

最初におみを見たとき、清二の胸は、何かにつかまれたように締めつけられ苦しくなった。

遠目ながら、おみのの背格好や感じが姉のおみちにそっくりだったからだ。

しかし、目ざとい清二は、おみの髪にささった赤塗りの櫛を見つけてしまった。

体が丈夫だったころ、父の源二は、おみちに赤塗りの櫛くしを買う約束をしていた。

結局、その約束は果たされなまま銀杏長屋に流れて来た清二たちだったが、

「他にはなんにもいらないから、小さな赤い櫛くしが欲しいなあ」

なぜ、姉がそれほど櫛くしを好むのかわからなかったが、物を欲しがらない姉が、ことあるごとに残念そうにつぶやくのを聴いて、

「俺が大きくなって、稼げるようになったら、十個でも百個でも好きなだけ買ってやるよ」

と、清二は心で答えていたのだ。

はやりやまい

その後、流行病に罹かかって、死の床にある時も、やはりおみちは、塗りの櫛くしが欲しかったなあ、とつぶやき、結局、その髪には何もささず、ひとり旅だってしまった。

だからこそ、幸薄かった姉が、あれほど欲しがった赤塗りの櫛くしを、姉に似たおみのが、何事もないように髪にさしているのが清二には気に入らなかつたのだ。

それが、理不尽ないがかりであるのは分かっている。

今日の話でも、おみのが決して幸せ一杯でないことはわかった。

「でも、どうしても俺は……」

思わず清二はそう口に出した。

いつの間にか、すっかり日は落ちて当たりは暗くなっている。

銀杏長屋では、よほどのことがないかぎり、夜に灯りは使わない。使っても、魚臭い魚油ぎよあぶらのとうしみがせいぜいだ。貧乏人は夜は寝るのだ。

だから、日が暮れるとあたりは真つ暗闇になる。

その闇の中に軽い足音が響いた。

誰かが、銀杏の木の横を通して、真つ暗な長屋に帰っていくのだ。

闇に慣れた清二の目に、髪にさされた櫛くしが映った。

「おみのだ」

考えるより早く、清二は木からすべり降りていた。

「ぎゃっ」

突然、背後に飛び降りた清二に驚いて、おみのは、後ろも見ずに掛けだした。後には、慌ててこぼしてしまつたらしい酒の匂いが強く残っている。

「頼まれて酒を買いに行つてたんだな……ん？」  
気づくと地面に櫛が落ちていた。

拾つた櫛を手で弄もてあそびつつ、清二は長い間迷つていた。

しかし、結局、櫛を持つておみのの家までやって来たのだ。

おみのの家には、まだ人の気配があつた。

もちろん、手渡しする気はない。ただ、表戸の人目につかない場所で、戸を開けたら、すぐに目にく場所に置いておくつもりだった。

櫛を置こうとした時、家の中からの「身売り」というかすかな言葉が聞こえてきた。

清二は、こつそりと長屋の横に回り込んで壁に耳をあてる。

「まったく俺が馬鹿だった」

おみのの父親の声だった。

「そうだな。芝居でのしくじりは、お前が親方にかわつて泥を被つたから仕方がないが、そのあとの博打は、お前の馬鹿だ」

見知らぬ声が答える。

「あんたのいう通りだ。おかげでおみのを身売りに出す羽目に……あいつはまだ十になつたばかりなのに」

「だから、俺が手引きしてやるから、二人で上方に逃げるんだ」

「だが、明日あたりから女衞せげんの来る月終わりまで、俺たちが逃げないように、矢七親分の手の者が見張りにつくだらう」

「どのみち、お前を逃がす用意ができるのは月終わり、奴らがおみのを連れに来る日だ。その日に俺がなんとかお前たちを逃がしてやる」

「すまねえ、兄貴」

「礼なら、この酒を買つてきてくれた、おみのに言いな」

呆然として清二は壁から耳を離した。

月の暮れといえ、銀杏焼きの日だ。

その日に、おみのは遊郭に売られていくのだ。

それを防ぐために、おみのの父親と、その兄貴分がおみのを連れて逃げようとしている。

頭がぐるぐると回るのを感じながら、清二は銀杏の木に登った。

そして、今まで幾度となく「どうしよう」とつぶやき続けていたのだった。

清二は夜空を見上げた。

枝の隙間から満天の星が見える。

一瞬、流れ星が走った。

突然、清二の鼻に、おみのの櫛に残った髪の毛の匂いが蘇った。香ばしい、枯れ草の匂いのする心地よい香りだった。姉のおみちの髪の毛の香りと同じだ。

「よし」

清二は力強く呟いた。

年に一度の「銀杏焼き」には、朝から皆が仕事を休み、気合いを入れた用意をする。

仕事といつても、ろくに働かない者が多い銀杏長屋のこと、いつもどおりには昼間から男連中があふれ

ていて、ただ、昼過ぎの「焼き」の準備に長屋横の広場に薪や粗朶そだを集めるだけなのだ。

「来たぜ」

銀杏の木にもたれて待っていると、息せき切つて徳が走ってきた。

「よし！」

清二は、木から身を離すと、おみのの家に向かった。

ここ数日と同じように、凶暴そうな顔をした男五、六人が、おみのの戸の前に立っている。

そのまま、清二は長屋の前の広場に向かった。

これから銀杏焼きが行われるため、大きなたき火がたかかっている。

毎年のように、銀杏長屋の連中だけでなく、おこぼれにあずかろうと他所よその長屋の連中もやってきて大変な人ばかりだ。

「長屋にいくためには、この広場を通らなきゃならねえはず」

背伸びをして遠くを見た清二は、長屋に通じる通りを、さっきの男たちより、さらに目つきの悪い男と、髪に白いものが混じった男が歩いてくるのを見た。

老人の前後には、体の大きな男が二人ずつ守るように歩いている。

あれが「ぜげん」というやつに違いない。となりの年寄りも矢七親分とかいうやつだろう。「見てろ！」

老人たちが、広場に入ってくるのと同時に、清二は、たき火の側に踊り出た。

「うわあ！」

叫びながら、銀杏の入り鍋を蹴り倒し、火の付いた薪も足で蹴り飛ばして、あたりに撒き散らす。

「な、なんだ」

「どうした」

「きゃあ！」

たちまち広場は大騒ぎになった。

暴れながら、清二は、老人たちが人波に巻き込まれ、それを助けようと長屋の方から、見張りの男たちが駆けつけるのを見た。

充分に騒ぎを大きくすると、追いかけてきた大人の手を逃れ、清二は、井戸から屋根の上上がった。

おみのの行方を確かめるためだ。

「清二！何てことしやがる。危ねえじゃないか」

清二を追いかけて屋根に登り、やつとのことので抑えこんだ長屋の大人たちは、力いっぱい頭をなぐりつけた。

目から火花が飛び、口が切れて血を流しながら、清二は、横目で、銀杏の木越しに、長屋の遠くを走り去る、おみのの小さな背中と赤い櫛を見た。

「元気でな」

そして、姉のおみちがなれなかった、赤い櫛の似合う大人の女の人になってくれ……

最後の方は言葉にならず、清二はまっすぐに気を失っていった。